

令和 7 年 8 月 23 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H03954

研究課題名（和文）社会的包摂を志向する公衆衛生看護の原理に基づくロジック・モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a logic model based on the principle of public health nursing to work towards social inclusion

研究代表者

大森 純子 (Omori, Junko)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：50295391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：地域住民のよりよく生きる権利を守るために社会の包容力、すなわち社会的包摂を志向することは、保健師の責務といえる。本研究では、現代社会における弱者を包容する地域づくりに取り組む保健師の実践知から、社会的包摂を志向する公衆衛生看護の概念構造を解明し、実践に適応可能な活動原理として『社会的包摂を志向する公衆衛生看護のロジック・モデル』を開発した。本モデルは、保健師が住民の基本的な人権と地域社会の安寧（健康で文化的な生活）を護るために、社会的包摂を意識して諸活動（地区活動・地区/地域アセスメントに基づく個別支援/各種事業の立案・計画・実施・評価・説明）を展開する活動原理の理論として活用できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発したロジック・モデルを用いることで、保健師が自身の実践について社会的包摂を志向する活動として捉え直し、地域づくりとして評価することが可能となる。モデル中に示された原則や関わり方の基本についてセルフチェックすることで、社会的包摂を志向しているか自己点検でき、保健師の責任の持ち方に関する意識変容を促進する。モデルの普及・定着により、保健師が早期に社会的排除の要因の存在に気づき、その状態を予防・改善する取り組みを企画・推進できる。保健師間でこのモデルを共有し、活動原理としてモデルを実践現場に浸透させることにより、保健師が地域づくりを通じて社会的責任を果たす機能を高めることも期待できる。

研究成果の概要（英文）：It is the responsibility of public health nurses to be oriented toward social inclusion, i.e., the ability to include society in order to protect the rights of community residents to live better. In this study, we elucidated the conceptual structure of social inclusion-oriented public health nursing based on the practical knowledge of public health nurses working to create communities that are inclusive of the vulnerable in modern society, and developed the "Logic Model of Social Inclusion-Oriented Public Health Nursing" as an activity principle that can be applied to practice. This model can be used as a theory of activity principles for public health nurses to develop various activities (district activities, individual support based on district/regional assessment, and proposal, planning, implementation, evaluation, and explanation of various projects) with an awareness of social inclusion in order to protect residents' basic human rights and the well-being of communities.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：社会的包摂 ソーシャルインクルージョン 公衆衛生看護 ロジックモデル 保健師 活動原理

1. 研究開始当初の背景

地域社会における人間関係の希薄化・縮小化により、育児や介護、災害や転居、独居や死別など、いつでも、どこでも、誰にでも、社会的排除のリスクが存在する。コロナ禍の中では、社会的排除のリスクがさらに高まり、社会的包摂の推進は国策の喫緊の課題である。住民のよりよく生きる権利を守るために社会の包容力を志向することは保健師の責務である。

2. 研究の目的

本研究は、現代社会における弱者を包容する地域づくりに取り組む保健師の実践知に着目し、社会的包摂を志向する公衆衛生看護の概念構造(原理)を解明し、実践に適用可能な活動原理のロジック・モデルを開発することを目的に、以下の研究の問い(RQ: Research Questions)を設定した。

RQ1: 社会的包摂を志向する公衆衛生看護の実践知はどこにどのように存在するか。

RQ2: 社会的包摂を志向する保健師の活動はどのような概念構造(原理)で成り立つか。

RQ3: 社会的包摂を志向する公衆衛生看護の原理をいかに実践に適用可能にするか。

3. 研究の方法

5か年の研究期間において、(1)~(7)の順に段階的に研究を進めた。

(1) 社会的包摂に関する国内外の政策動向および研究動向を検討した。

(2) Social Inclusion の概念分析によりロジック・モデル原案を描出した。

(3) ロジック・モデル原案の保健師活動への適用可能性を検討した。

(4) 保健師の実践事例に関するヒアリング調査を基にロジック・モデルを考案した。

(5) ロジック・モデルの信頼性と妥当性を担保し、実践現場への適用可能性を高めた。

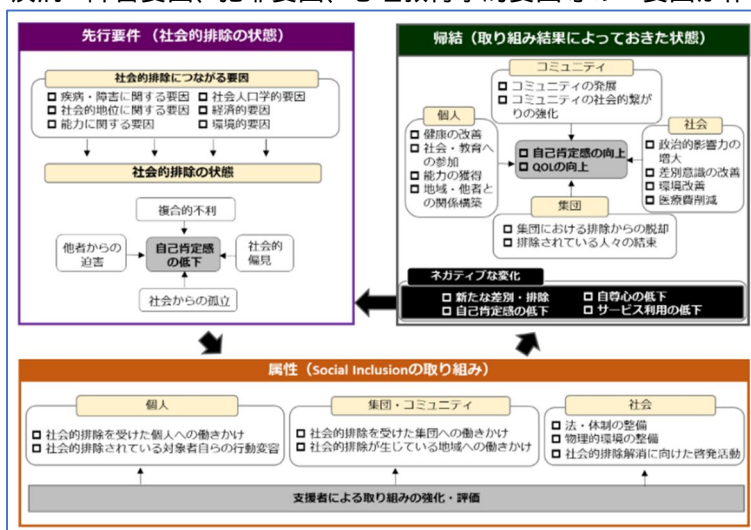
(6) ロジック・モデルの探索的実装トライアルの教育プログラムと教材を作成した。

(7) 教育プログラムの実施・評価を通して原理モデルの実践への適用による効果を検証した。

4. 研究成果

(1) 国外の動向として、EU(欧州連合)の移民政策による格差社会の進展から、社会統治のスローガンとして Social Inclusion へ拡大展開したことが確認できた。Social Inclusion に関する動向の検討からは、貧困対策等の経済的側面を支援するという観点からの取り組みが多かった。国内の動向では、社会的排除への関心の高まりから、共生型サービスが福祉に取り込まれた経緯が確認できた。保健福祉政策においては、社会的弱者の生活支援や社会参加という文脈での取り組みが多く、近年の政策では地域共生社会や地域包括ケア等の類似概念として用いられるようになった。社会的包摂は今日の政策理念におけるキーワードであるが、未だ活動報告に留まり、学術的な議論は今後の課題であるとの示唆を得た。

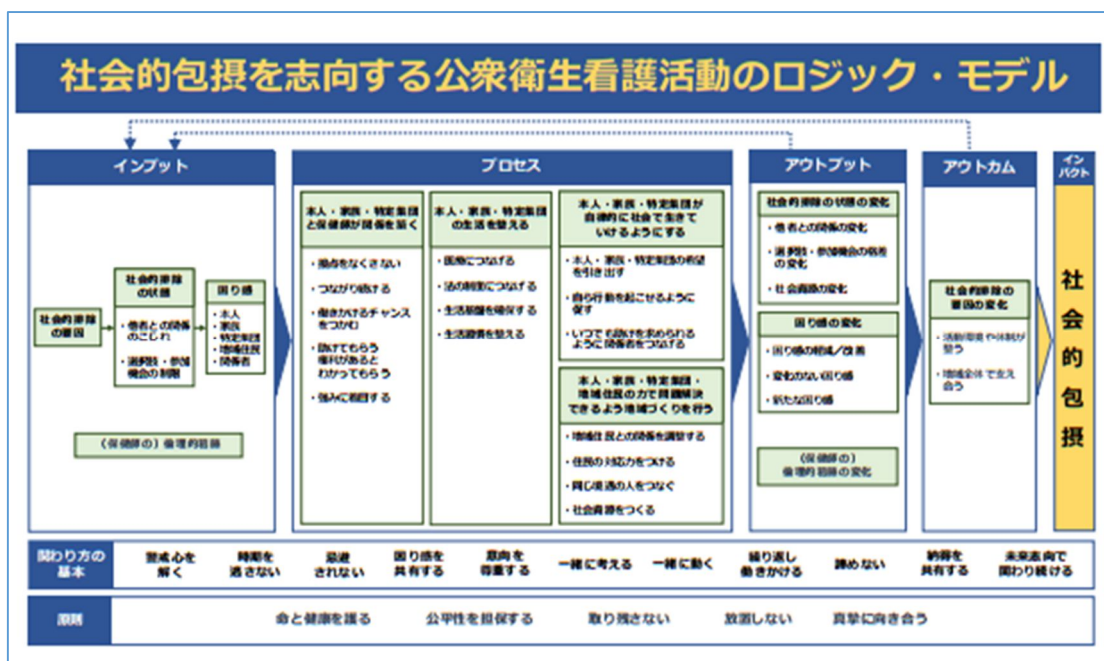
(2) 社会的包摂は日本の政策用語として使われており、学術的研究が希少であることから、Pub Med と Web of Science を用いて "Social Inclusion" and "community" または "Social Inclusion" and "nurse" をキーワードに、英文献を検索した。2020年2月3日時点で検出された129件のうち、会議録等を除いた64文献を分析対象とした。分析は Rodgers (2000) の概念分析の手法に基づくデータシートを作成し、概念に先立って生じる出来事である先行要件、概念の性質を示す属性、及び概念が生じた結果起こる帰結を抽出した。抽出した内容はコード化し、共通性や相違性に注目して[カテゴリ]を生成した。Social Inclusion の先行要件は、社会的排除の状態やそのリスクを表し、経済的要因、疾病・障害要因、犯罪要因、心理教育学的要因等の7要因が作用していた。属性には、社会的排除によって生じる不利益を改善するための行動を示す[差別的意識の改善に向けた啓発][地域・社会への参加の促進]等の20カテゴリが抽出された。帰結には、行動によって変化した状態を示す[権利と平等の獲得][健康の改善]等の10カテゴリが抽出された。先行要件、属性、帰結の関係は相互に作用し、行動の結果として起こった状態(帰結)を評価し、それを基に新たな行動(属性)を実施する循環プロセスの構造を有していた。Social



Inclusion は社会的排除を予防・改善するための循環プロセスであると捉えられ、「社会的排除の状態に陥らないようにするための予防、あるいはすでに発生している社会的排除の状態を改善するために行われる様々な働きかけやそのプロセス」と定義を導出した。

(3) Social Inclusion の概念分析により作成したロジック・モデル原案について、実践現場での適応可能性および活用方法について意見交換を行うワークショップ(日本公衆衛生看護学会学術集会)を開催した。参加者には、実際に自身の実践事例をモデル原案に当てはめてもらい、どのような気づきがあったか、どのような取り組みが社会的包摂を志向した活動といえるか、このモデルを使うことで何が可能となるかなど意見聴取を行った。保健師による人権の問題に関する気づきや何とかしたいという使命感や情熱など、言語化できなかった保健師活動の基本的態度や地域を意識する視点を説明する枠組みとして有効である、現任教育や基礎教育にも活用できるとの意見を得た。

(4) Social Inclusion の概念分析を基に作成したロジック・モデル原案をフレームワークとして、ケーススタディー法を用い、12 名の中堅期保健師に社会的包摂を志向した公衆衛生看護の活動事例についてヒアリングを行った。仮説検証型 multiple case study アプローチを用いてモデル原案に追試を重ね、日本の公衆衛生看護の実践に適応可能なロジック・モデルを考案した。分析は、ケース毎の特徴を把握し、<インパクト>を社会的包摂とするロジック・モデルの構成要素を抽出した。保健師の社会的包摂を志向する公衆衛生看護活動は、命と健康を護る、公平に、取りこぼさない、放置しないなどの<原則>と、時機を逃さない、意向を尊重する、一緒に動く、繰り返し働きかける等の<基本姿勢>を礎に展開されていた。<インプット> 疾病・疾患、社会文化的要因等のため、他者との関係のこじれ、選択肢の制限という社会的排除の状態が生じ、この状態は社会的排除を受けている当事者、地域住民、保健師の困り感として把握されていた。<プロセス> 保健師はこの困り感に対し、当事者との関係を築く、当事者の命と健康を護る、当事者が自律的に社会で生きていかれるようにする、当事者・地域住民の力で問題解決できるようにすることを目的に活動を行っていた。<アウトプット> 他者との関係の変化、選択肢・参加機会の格差の変化という社会的排除の状態の変化がみられ、当事者、地域住民、保健師の困り感の軽減・改善が見られる場合もあったが、困り感が変化しない場合や、新たな困り感が生じる場合もあった。加えて、保健師は活動の結果にジレンマを感じる事もあった。<アウトカム> 保健師が活動を継続する中で、行政組織の変化と社会的排除の要因の変化が見られ、社会的包摂につながっていた。社会的包摂を志向する活動の基礎には社会的公正、活動の展開には個人から地域社会への広がり確認でき、命と健康を護る基軸が存在した。

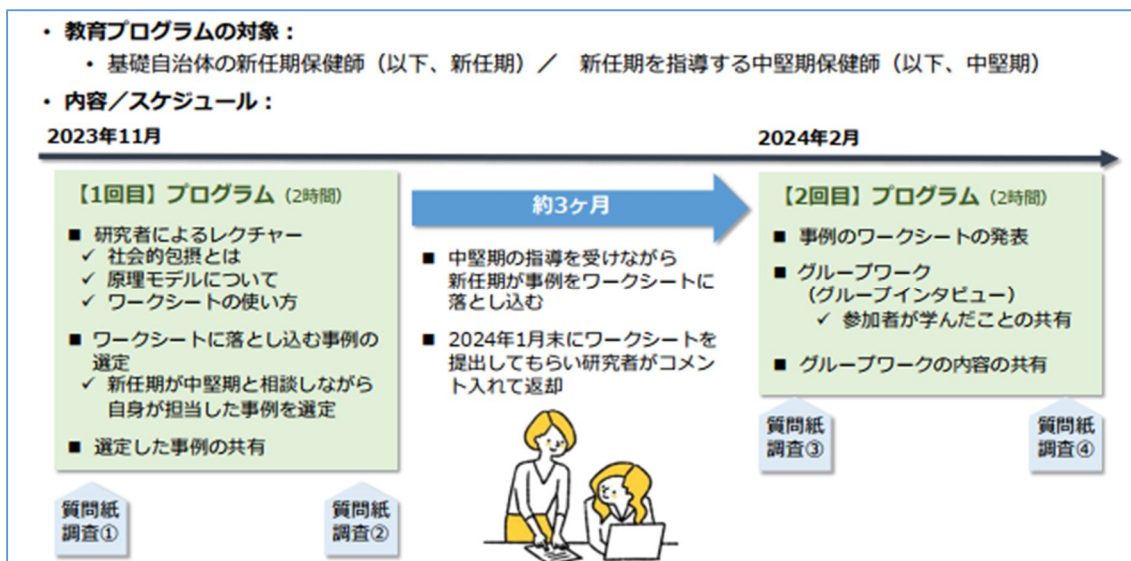


(5) 考案したモデルの信頼性と妥当性を担保するため、ワークショップ(日本公衆衛生看護学会学術集会)を開催し、モデル全体の論理について適切か、現場で受け入れ可能かなど、現場の意見を広く聴取した。次いで、全国の管理期保健師 6 名を対象にグループインタビューを行い、表現や用語について意見聴取し、検討を重ね、ロジック・モデルを洗練した。ワークショップの意見聴取、および管理期保健師のグループインタビューより、ロジック・モデルの実装段階に向けて、方法論的示唆を得た。

(4)と(5)より、保健師がこのロジック・モデルを活用して日頃の活動を見直す、あるいは計画・実施・評価することにより、社会的包摂を志向する公衆衛生看護を推進できる可能性が示唆された。実践現場での適応・普及に向け、開発したモデルを実際に適応したことによる志向性の高まりなどの効果を検証する必要性、および研究推進の方向性を確認した。

(6)ロジック・モデルの構成要素を用い、社会的包摂を志向する公衆衛生看護を実践現場に根付かせる実装段階に向けて、探索的に適応効果を検証する準備を整えた。ロジック・モデルを用いた教育プログラムを活用して保健師集団の意識変容をねらいたい協働自治体を募り、探索的実装トライアルの試行にむけた調整を開始した。ロジック・モデルの理解を深め、自身の活動の見直しを促す教育プログラムを考案し、実践現場への適応を図るために必要な教材となる、モデルの解説書、事例集、実践を振り返るリフレクションシート、社会的包摂の志向性の変化の評価指標・項目などを作成した。

(7)社会的包摂を志向する公衆衛生看護活動のロジック・モデルに関する教育プログラムを実施した。対象は、基礎自治体の新任期保健師(以下、新任期)5名、新任期を指導する中堅期保健師(以下、中堅期)5名の計10名、方法は、1回2時間、2回の対面集合とした。1回目は研究者が社会的包摂とロジック・モデル、ワークシートについて説明し、新任期が実際に振り返る事例を中堅期と相談し、その概要を共有した。2回目までに新任期が中堅期の支援を受けて事例への関わりを振り返り、ワークシートに、ロジック・モデルの原則、関わり方の基本を中心に意識した事等を記入した。2回目では新任期がワークシートの発表を行った後、新任期中堅期に分かれて学んだ事や自身の保健師活動の変化について意見交換を行った。



1回目の前後、2回目の前後にロジック・モデルの原則、関わり方の基本を意識する程度等を問う自記式質問紙調査を実施した。分析はFriedman検定を実施後Steel-Dwass検定で多重比較を行った。加えて、2回目の意見交換から質的な評価を行った。多重比較にて1回目実施前と2回目実施後の間で有意に改善した項目は、ロジック・モデルの原則の取り残さない、放置しない、関わり方の基本の対象と一緒に動く、繰り返し働きかける、未来志向で関わり続けるであった。新任期の振り返りでは、目の前の個別ケースや家族の困り事に立ち向かうことに必死で、地域に目を向けられていなかったことが分かった等の意見があった。中堅期からの振り返りでは、普段意識せずにやっていることを言語化してもらえた、自分達の活動のプロセスが可視化され評価できる、活動の意義が見いだせる等の意見があった。教育プログラムについて、保健師の社会的包摂を志向した活動の促進に一定の効果が確認できた。

本研究で開発したロジック・モデルは、公衆衛生看護におけるEBI(Evidence Based Innovation)として有効であることが検証できた。今後は、社会的包摂を志向する認識と活動の定着に向けたフォローアップと基礎・現任教育における普及が必要と考えられる。実装科学に基づき、ロジック・モデルを自治体の課題意識に応じて活用できる実装パッケージの開発、およびエビデンス拠点の構築が必要であり、研究の発展的方向性が明確となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 岩本萌 |
| 2. 発表標題 Social Inclusion 概念分析 |
| 3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 松永篤志 |
| 2. 発表標題 社会的包摂を志向する公衆衛生看護のロジックモデルの考案 |
| 3. 学会等名 第11回日本公衆衛生看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 岩本萌、佐藤美沙、藤崎万裕、松永篤志、竹田香織、中野久美子、川口夏樹、大森純子。 |
| 2. 発表標題 「Social Inclusion」の概念分析 |
| 3. 学会等名 第9回日本公衆衛生看護学会学術集会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 松永篤志、都筑千景、山下典子、澤田恵津子、中野久美子、岩本萌、原ゆかり、新家静、大森純子 |
| 2. 発表標題 社会的包摂を志向する保健師活動原理モデル普及の教育プログラムの考案 |
| 3. 学会等名 日本地域看護学会第27回学術集会 |
| 4. 発表年 2024年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 都筑 千景 (Tsuzuki Chikage) (00364034) | 大阪公立大学・大学院看護学研究科 ・教授 (24405) | |
| 研究分担者 | 松永 篤志 (Matsunaga Atsush) (70781730) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |
| 研究分担者 | 中野 久美子 (Nakano Kumiko) (20811269) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |
| 研究分担者 | 原 ゆかり (Hara Yukari) (20756259) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |
| 研究分担者 | 岩本 萌 (Iwamoto Megumu) (70894492) | 東北大学・医学系研究科・助教 (11301) | |
| 研究分担者 | 田口 敦子 (Taguchi Atsuko) (70359636) | 慶應義塾大学・看護医療学部(藤沢)・教授 (32612) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 竹田 香織 (Takeda Kaori) | | |
| 研究協力者 | 麻原 きよみ (Asahara Kiyomi) | | |
| 研究協力者 | 上野 昌江 (Ueno Masae) | | |
| 研究協力者 | 川口 夏樹 (Kawaguchi Natsuki) | | |
| 研究協力者 | 川崎 涼子 (Kawasaki Ryoko) | | |
| 研究協力者 | 岸 恵美子 (Kishi Emiko) | | |
| 研究協力者 | 佐伯 和子 (Saeki Kazuko) | | |
| 研究協力者 | 酒井 太一 (Sakai Taichi) | | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 佐藤 美沙 (Sato Misa) | | |
| 研究協力者 | 澤田 恵津子 (Sawada Etsuko) | | |
| 研究協力者 | 白岩 恵子 (Shiraiwa Noriko) | | |
| 研究協力者 | 新家 静 (Shinke Shizuka) | | |
| 研究協力者 | 藤崎 万裕 (Fujisaki Mahiro) | | |
| 研究協力者 | 山下 典子 (Yamashita Noriko) | | |
| 研究協力者 | 山下 留理子 (Yamashita Ruriko) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|